

レヴィナス思想における「子ども」の意味

—過去・現在・未来を貫く〈善さ〉—

福若 真人

1. はじめに

本稿は、エマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas 1906-1995) の著作に登場する「子ども enfant」に関連する諸概念を分析し、そこから導かれる「子ども」の特徴について明らかにするものである。

「子ども」に関するレヴィナス思想の先行研究では、主として『全体性と無限』(1961)の第四部「顔の彼方」で論じられる「多産性／繁殖性 fécondité」という概念が取り上げられている。そこでは「子ども」という存在の特殊な様相や、「子を産む／生む」¹という行為に表れる主体のあり方が考察されている。

だが、「多産性／繁殖性」をめぐる議論は複雑であり、理解の仕方も批判の方向性も多様に存在する。とりわけ、性をめぐる問題をどのように捉えるのかという点に関しては、『全体性と無限』だけでなく『存在の彼方へ』(1974)を含む後期思想やそれ以前の著作にまで視野を広げることで、その意味内容も議論すべき問題も深まる²。ゆえに、「子ども」に関わるレヴィナスの論は、レヴィナス思想全体を通じて吟味される必要がある。

他方、レヴィナス思想の諸概念をもとに「子ども」という存在の特徴を導き出す先行研究も存在する³。例えば、大人と子どもとの関係性を見直す手がかりとして、「無垢 innocence」という概念が検討されている。しかし、そこではレヴィナス自身が言及していた「無垢」の特徴が反映されておらず、「子ども」に表れている「無垢」の理解が十分ではないといった問題点が残されており、更なる検討が必要である。

以上の点を踏まえたうえで、本稿では「多産性／繁殖性」と「無垢」に加えて、「子ども」に関連する概念として表れる「若さ jeunesse」の特徴について検討する。それにより、レヴィナスが言及する「子ども」にどのような特徴が見られるのかが明らかとなる。また、「多産性／繁殖性」と「若さ」に着目することで、彼が「子ども」にどのような時間の位相を見て取ろうとしていたかが明らかとなる。先取りすれば、彼が言及する「子ども」の時間の位相は、近代的自我の時間意識に根ざした「子ども期」の捉え方と異なるものである。その違いから我々は、レヴィナス特有の「子ども」の特徴や時間の位相をもとに、近代的な子ども観とは異なる子ども観を見ることとなる。そしてその子ども観から、人間にとって「子どもであること」の意味や、「子ども」を育てる、あるいは教育するとはどういうことか、という問いに対する一つの応答が導かれることとなるだろう。

改めて本稿の手順を確認しておく。まず、「多産性／繁殖性」の文脈で語られる「子を産む／生む」という営みから見えてくる「子ども」の様相を確認する。次に「無垢」概念について先行研究の要点を確認し、レヴィナス自身の著作に登場する「無垢」との異同を比較する。さらに、「子ども」に関するもう一つ概念としての「若さ」について検討し、以上の三つの概念から導かれる「子ども」の特徴とそこに表れる時間の位相を明らかにする。そして、それが近代的な子ども観とどのように異なるかを検討することにする。

2. 「子を産む／生む」ことに表れる根源的なもの

ここでは、「多産性／繁殖性」の文脈から窺える「子ども」の特徴と、「子を産む／生む」という営みに表れているレヴィナス特有の意味について検討する。「多産性／繁殖性」について主題的に論じられた『全体性と無限』での議論だけでなく、初期思想に表れていた論点を踏まえることで、そこから表れてくる「子を産む／生む」ことの意味と、主体と他者との関係から見えてくる「子ども」の特徴が明らかとなる。

2-1. 「多産性／繁殖性」に表れる「子ども」——未来という時間の導入

「多産性／繁殖性」という術語は『全体性と無限』の第四部「顔の彼方」で主題的に論じられるが、そのエッセンスとなる内容は1946年の講演「時間と他者」のなかで既に言及されている。時間を「孤立した独りの主体による産物」ではなく「主体と他者との関係そのもの」として捉えることを目標としたこの講演において、「多産性／繁殖性」もまた時間の問題、すなわち「主体と他者との関係」の問題に関連していた。

講演において、レヴィナスが言及する「主体と他者との関係」には「他なるものの不在」が見られ、それは「未来という地平での不在」でもあると捉えられている⁴。そして、その「未来という地平」において「ある個人的な生が超越的な出来事の只中で構成される」ことになると彼は指摘する。ここでいう「超越的な出来事」が「多産性／繁殖性」と呼ばれるものであり、それによって構成されるのが「子ども」なのである。

ここで注意しなければならないのは、「多産性／繁殖性」が生物学的現象としての生殖によって「子ども」を生むことではなく、現存する個人の生が不在となる未来において「超越的な出来事」を通じて「子ども」が構成されることを意味するという点である。確かに「子を産む／生む」という行為や、次に見る「エロス」論で語られる「愛撫」という行為のように、生物学的な接触現象をレヴィナスは取り扱っている。だが、それは単なる親から子への生物学的遺伝や、生きた記憶の伝承といった次元の出来事として語られているわけではない⁵。具体的に描かれている行為は、他なるものへの主体の関わり方を探究するためのメタファーなのである。

そのうえでレヴィナスは、「多産性／繁殖性」に関する文脈において、「私は私の子どもを有するのではない。私はある意味では私の子どもである⁶」という、極めて奇妙な言説を残している。これは、未来における「子ども」に「超越的な出来事」として私の生が構成されるという点で「私はある意味では私の子どもである」のだが、その生を所有する権能は私にはないという意味で「私は私の子どもを有するのではない」ことを言い表している。「多産性／繁殖性」に描かれている現に生きる私の権能の彼方、「可能なものの彼方」が「顔の彼方」として『全体

性と無限』で探究されるのであり、その彼方に構成される「子ども」には、未来という時間が付与されているのである。

さて、このような「多産性／繁殖性」によって構成される「子ども」がレヴィナス思想において主題的に論じられていたわけだが、そこで描かれる「子ども」は、先に述べたように生物学的遺伝によって大人と繋がっているわけではない⁷。にもかかわらず、彼によれば大人と子どもは繋がっているという。では、大人と子どもは一体どのように繋がっているのだろうか。また、「子を産む／生む」という行為が具体的な現象を指しているのではないのだとすれば、繋がっているという大人と子どもの関わりのなかで、その行為はどのような意味を持っているのだろうか。現に生きる大人が「超越的な出来事」として「子ども」を構成するとは、具体的に何を意味しているのだろうか。

2-2. 大人と子どもとを繋ぐ「根源的なもの」——「贈与する権能の贈与」という〈善さ〉

まず、大人と子どもとの繋がりについて確認する。この問題について考えるために、「多産性／繁殖性」の前に検討されている「エロス」論に立ち返ってみる。他者とのエロスの関係をめぐって、レヴィナスは「女性的なもの」に対する「愛撫」という行為を取り上げる。ここでの「愛撫」とは、なにもものも把持しないことを意味する⁸。それは見えないもの、触れられないもの、捉えられないものに対する飢えであり、その接触の不可能性によって主体は「気を失う」事態にまで至る。愛撫する主体は「かたちのない〈私ではないもの〉」——「女性的なもの」——によって「絶対的な未来」に運び去られ、かつ主体としての地位を失うのである⁹。

つまり、「女性的なもの」への主体の愛撫とは、前節に見た「超越的な出来事」の一つのあり方であり、それにより主体は自らの権能を失いながらも、彼方としての絶対的な未来に運ばれるのである。この一連の現象をレヴィナスは「超-実体化 trans-substantiation」と呼び、そこに「子を産む／生む」ことを見て取るのである。とはいえ、注意しなければならないのは、主体が自らの権能や地位を失いながらも、決して「みずからの同一性から解きはなたれたわけでは」なく、主体の「存在にその意味と方向づけを与えていた自己性が、そのような自己放棄によって失われることはない」という点である。「私はある意味では私の子どもである」というのは、自らの権能を失いつつも主体の同一性や自己性という根源的なものが、絶対的未來としての「子ども」においてなお、保持されているということの意味しているのである。

したがって、未来という時間を付与された子どもと主体としての大人は、主体の持つ同一性や自己性といった「根源的なもの」によって繋がっているとと言える。そして「子を産む／生む」ことを通じて、この「根源的なもの」の世代交代が行われるのである¹⁰。だが、この「根源的なもの」とは具体的には何を意味しているのだろうか。

「根源的なもの」として挙げられる「同一性」や「自己性」という概念自体は、主体の権能による暴力というレヴィナス思想の問題群からすればネガティブな要素に捉えられがちであるが、ここではむしろポジティブな意味を有している。端的に言えば、主体が「子ども」に対して残す「根源的なもの」とは、「子を懐胎すること」を指している。繰り返しになるが、これはあくまで「超越的な出来事」としての表現であって、生物学的な現象を指しているのではない¹¹。「子を懐胎すること」は、レヴィナスにとって〈善さ Bien〉という彼特有の性格を帯びるもの

であり、「贈与を課する犠牲」を超えた「贈与する権能の贈与」であると捉えられている¹²。この〈善さ〉については後に詳しく見ていくことにするが、〈善さ〉としての「贈与する権能の贈与」は「多産性を産み出す多産性をつうじて」達成されるものである。

つまり、「多産性を産み出す」ための「多産性」、言い換えれば「子を産む／生む」ことによって、「子を懐胎する」という「贈与する権能の贈与」の性質を帯びた「同一性」や「自己性」が〈善さ〉として、未来に構成されることになるのである¹³。

3. 「子ども」に表れる「無垢」概念の異なる観点

ここまでは「多産性／繁殖性」をめぐる大人と子どもとの関係から、未来に構成される「根源的なもの」がどういうものかを見てきた。「未来という地平」に構成される「子ども」には、「多産性を産み出す」ために「子を懐胎する」——「贈与する権能の贈与」——という〈善さ〉としての「同一性」や「自己性」を見て取ることができた。

だが、このようにして捉えられる「子ども」は、大人が存在から出発した概念であり、また生物学的な関係とは異なる「超越的な出来事」において構成される存在であった。ゆえに、あくまで「子ども」の一つの側面が明らかになったにすぎない。

そこで次に検討するのは、「子ども」に表れる「無垢」という特徴についてである。冒頭でも述べたように、この「無垢」に関する先行研究の見解には、レヴィナス自身が言及する「無垢」の見解が反映されていない。では、先行研究の見解とレヴィナスの見解の間にはどのような異同が見られるだろうか。

3-1. 「無垢」なる子どもに表れる他者性——「超社会化」による「可傷性」の再起動

まず、「無垢」概念に関する野村洋平の論点を確認する。彼のいう「無垢」とは「人間が持つ子ども性の一面」を表す概念であり、それは「人間の生のある一時期や一定期間にのみ顕著となるようなものではなく、人間の生の全体にかかわる問題」に通じている¹⁴。

このような「無垢」は子どもと接触する経験において表れる。そして子どもの「無垢」に接触した主体には、「社会外の力が社会内に入り込み、自己が開かれる」ような変容が生じる。つまり野村は「社会外の力」や主体の自己変容を生じさせる「無垢」に、主体の理解による同化・包摂から逃れ出て揺さぶりをかけるという、レヴィナス的な他者性を見ているのである¹⁵。ただし野村によれば、「無垢」は他者と同義ではなく、あくまで他者の属性の一つであり、「社会外の力」——レヴィナスの術語を借りれば「無限」の力——が社会内に現れたときの一形態であると指摘している¹⁶。

また、野村にとって子どもとは、社会の秩序や意味連関と深く関わっていない存在であるがゆえに、主体が子どもの「無垢」に触れるためには、一般的な他者理解とは異なる形で感受する能力が必要であった。彼はその能力にレヴィナスの「可傷性 *vulnérabilité*」を対応させる。つまり「無垢」の第一の機能を他者性とするならば、それに接触する主体に「可傷性」を要求することが第二の機能となるのである。

「無垢」という、とりわけ子どもに見られる一面に触れることで、社会の秩序や意味連関——レヴィナスの術語でいう「全体性」——に機能が妨害された「可傷性」が再び働き出すこと

になる。このような「可傷性」を取り戻すことを「超社会化」といい、「無垢」を通して得られる「超社会化」によって、大人だけでなく子どもも自らの生を生き直すことが可能になると野村は指摘する。

以上の野村の論点から、子どもに表れる「無垢」の特徴を整理すると次のようにまとめることができる。まず「無垢」が有する性格を、ある一時期や一定期間に限定的に表れるものではなく、人間の生全体に関わるものとして見ている。また、先述した「多産性／繁殖性」とは異なり、「無垢」に接触する際の子どもは、他者と対面し自らの生を生き直すことを可能にする現在という時間の位相に存在している。そして「無垢」の機能は、それに接触する主体を変容させる力を有している。

確かにレヴィナス思想を援用することで、子どもに表れる「無垢」概念の一面を明らかにすることができた。しかし、野村の「無垢」概念はあくまでレヴィナス思想における他者性のみが反映されたものでしかなく、レヴィナス自身が語る「無垢」概念の検討はなされていない。では、レヴィナスが語る「無垢」概念の特徴は、野村によって導かれた特徴とどの程度異なりを見せるのであろうか。

3-2. 「誘惑の誘惑」に表れる「無垢」との違い

レヴィナスの著作においても、「無垢」は現在する「子ども」の特徴の一つであると捉えられている¹⁷。また子どもには、子どもゆえに有する「無垢」性があることも認められている¹⁸。だが、「無垢」や「子ども」に対する彼の観点には、ネガティブな側面が見られる。

例えば1964年に行われた講演「誘惑の誘惑」¹⁹においてレヴィナスは、「純潔無垢には考えの浅い愚直さと子どもっぽさがはりついていて、成熟した人間にはどうしてもなじまない²⁰」と述べている。また、同じ講演の他の箇所においても、「子どもっぽさ」にあたる「幼児性 enfance」には、「無邪気」「軽率」「愚直さ」「単純さ」といった消極的な表現が伴っている。そして、それらは皆「成熟」に対置される関係にある。

この講演の主題である「誘惑の誘惑」とは、「知ることの誘惑」²¹や「哲学」²²、すなわち知を通じて他なるものを全体のうちに包摂しようとする営みを表している。レヴィナスはそこに「不変にして一なる者となる前に、さまざまな人生の可能性を享受し、濫費し、繰り抜けるべきだ²³」という西欧人の特徴を見て取る。

レヴィナスによればこの「不変にして一なる者」、言い換えると「清き者」であることは至高の義務でありながら、それは「純潔無垢」の状態にとどまり続けることでは達成できない。なぜなら「幼児的愚直さ」が伴う「純潔無垢」という状態は、あらゆる誘惑の手前にとどまっておき、それゆえに誘惑に抗する保護力がなく、本質的に過渡的で、保護されることを要求しているためである²⁴。そのような誘惑に対抗する力を持たない「無垢」は「手さぐりで物を求める」にすぎない。「清き者」となるには、むしろ「成熟」に含まれている「明晰さ lucidité」が必要である。この「明晰さ」は知によって包摂されることがない。つまり、「成熟」が有する「明晰さ」によって「誘惑の誘惑」は超克されることになるのである。

以上の点を踏まえつつ、レヴィナス自身が言及した「無垢」概念の特徴を整理してみよう。まず「無垢」という概念自体には、「成熟」に対置される「幼児性」が表れていた。この幼児性

は決して年齢的な特性を表すものではなく、存在そのものの未熟さや脆弱さを表すものである。それゆえに「無垢」は「誘惑の誘惑」に抗することができない。「誘惑の誘惑」を超克するのは、「明晰さ」を持つ「成熟」の位相においてなのであった。

この点に先に見た野村の「無垢」との違いを見て取ることができる。野村のいう「無垢」には、主体に社会の秩序や意味連関によって妨害された「可傷性」を取り戻させる力があつた。この社会の秩序や意味連関は、レヴィナスの術語でいう「全体性」と同義に扱われていたが、それは知によって他なるものを全体のうちに包摂するという「誘惑の誘惑」とも同義だと言える。だが、野村の「無垢」とは異なり、レヴィナスの「無垢」には「誘惑の誘惑」を超克することができない。つまり、「子ども」に同じ「無垢」という特徴を見たとしても、「全体性」に対する関わり方が異なっているのである。

したがって、「無垢」という「子ども」の特徴に着目したとき、「可傷性」を要求する他者性にポジティブな面を見る野村と、存在様態として「誘惑の誘惑」に抗することができない「幼児性」にネガティブな面を見るレヴィナスという、二つの立場が表れてきた。この立場の違いが、後に見る近代的自我の子ども観と異なるレヴィナスの子ども観に反映されることとなる。

ところで、「誘惑の誘惑」を超克する「明晰さ」についてレヴィナスは、その具体例として「私たちは行います、私たちは聴き従います²⁵」という、ヘブライ語聖書に書かれているような「善の無条件承認」を挙げる。ここでいう「善」とは善悪の選択に先んじて承認されるものであり、「誘惑の誘惑」から導出された「道徳的超・領域性」を排除するものである。この講演では、そのような「善」は「明晰さ」を有する「成熟」の位相に見てきた。しかし、「成熟」にある「善」の特徴が「子ども」にはない、というわけではない。「無垢」という観点では得られなかったその特徴を、次に見る「若さ」という「子ども」の側面から見るのであつたのである。

4. 「子ども」の条件としての「若さ」

レヴィナスが「子ども」およびその派生語を用いている文脈を辿ってみると、ある物事における初期の状態（揺籃期）や、一般的な子ども時代を指すもの、ユダヤ人の子どもについて言及するもの、そして、聖書に関連するテキストに現われる子どもについて言及するもの、などが見られる²⁶。とりわけ多く見られるのが、最後の聖書の内容に関連するものであり、「イスラエルの子（民）」という表記が目立つ。それぞれの詳細に立ち入ることはできないが、ここでは「イスラエルの子（民）」に関わりつつ、「子ども」の特質として表れる「若さ」という性格について論じたレヴィナスの講演「イスラエルと若者」を取り上げることにする²⁷。

この講演はイスラエルの若者を主題としつつ、『民数記』に登場する「ナヅル人」の誓願に関する註解が全体を通じて行われる形で進められている。「ナヅル人」の誓願、それはイスラエル人がある一定期間おのれの身に条件を課すことに関する誓願を意味している。端的に言えばレヴィナスは、自らにいくつかの禁忌を課すことを通じて「無私 *désintéressement*」を体現した「ナヅル人」に、「若さ」という特徴を見出そうとするのである。

ここでいう「無私」とは、レヴィナスによれば「道徳的」なものではなく、「存在者の本質」に対立する根源的な意味における「無私」である²⁸。それはレヴィナスの後期思想において「内存在性の我執」として語られる「存在者の本質」に対立する「無私」と同義であり、「恒常

的な持続」や「自己意識」、「ナルシスム」などと並列して言及される「思惟の思惟」「西欧哲学」に対置されるものとしての「無私」を意味している。つまり、この「無私」は先に見た「誘惑の誘惑」に対置されるものなのである。

だが、そのような姿を有する「ナジル人」に「若さ」が必要なのはなぜか。レヴィナスによると、ここでいわれる「若さ」とはまず「子供であることの条件」であるという²⁹。それは「子ども」の年齢とは無関係であり、「永遠なる者に対する受容性」という特徴を言い表している。言い換えると「ナジル人」に見る若者の「若さ」とは、「主の子供」として「永遠なる者に対する受容」を誓い、トーラーを学びながら裁きを行い、トーラーの刷新を遂行するような主体のあり方を指しているのである。そして、その「若者」の最たるものが「主の子供たち」と呼ばれる、「ナジル人」としての「イスラエルの子（民）」なのである。

また、「ナジル人」に表されている「若さ」には更なる特徴が見られる。それは「ナジル人」の誓願が「自分たちの誕生に先んじて」開始されるという点である。彼らの誓願は利害の絡んだ悔悛とは無関係であり、自らの選択のみならず、自らの存在の誕生にさえも先んじているものなのである。それゆえに「ナジル人」の「若さ」は、「想像を絶した若さ、若さ以前の若さ、あらゆる老衰に先んじた若さ」、すなわち「前 - 始原的な若さ、歴史の時間の中に入り込んでゆくより前の若さ」とも言い換えられる³⁰。

つまり、このような「ナジル人」の「若さ」に、自らの選択に先んじた「善」の選びを受容した姿勢が窺えるのである³¹。この「善」は前節に見た「無条件承認」としての「善」と同義であり、現存する私の権能が無くなるという意味で、「多産性／繁殖性」における「贈与する権能の贈与」に見た〈善さ〉とも共通する。したがって、レヴィナスの「子ども」に関連する概念から導かれる主体のあり方には、主体が自由に選べるとは限らない、この〈善さ〉という特徴が根底で通じているのである。

さらに「若さ」の場合、それが「前 - 始原的な若さ、歴史の時間の中に入り込んでゆくより前の若さ」といわれるように、一般的に語られる時間の流れよりも前に遡るものであり、〈善さ〉が主体の選択に先立つのも、この「若さ」ゆえである。つまり、ここでの「若さ」を有する「子ども」には、ある意味では「過去」以前に遡るような時間の位相を見ることができるのである。

5. 子ども期に貫かれる〈善さ〉——近代的自我における子ども期との異同

さて、ここまでの検討によって、「多産性／繁殖性」において構成される「子ども」の特徴、「無垢」そして「若さ」という性格が付与された「子ども」の姿が明らかになってきた。まずそこから導かれたのは、それぞれの概念に関わる主体のあり方の根底には〈善さ〉が関係するという点であった。そして、それぞれの概念に表れる時間の位相に着目したとき、「多産性／繁殖性」に表れる「子ども」には主体の権能の彼方にある「未来」、「無垢」を有した「子ども」には「現在」、そして「若さ」に表れる「子ども」には「過去」以前に遡るような位相を見ることができた。では、このような「子ども」に付随する時間を「子ども期」として理解するとすれば、そこにどのような特徴を見ることができただろうか。

近代的自我の時間意識における子ども期の意味を探究した矢野野司によれば、子ども期とは神話的・宗教的な時間意識の堅固な支えを欠き、充実した現在をもつことのできない「時間の

解体感」を克服するために理想化された〈願望時間〉を意味している。〈願望時間〉には過去に向けられた「ノスタルジーとしての子ども時間」と、未来に向けられた「希望としての子ども時間」というあり方がある。前者は「過去の甘美な思い出へと退行回避することによって現在を解体していく」のではなく、「よりよい未来へと向かうために返ってくる根源」によって、現在を生きる中で直面する「時間の解体」に耐えることを可能にする³²。一方、未来に理想化された後者の時間には「実現されなかった自己の理想を子どもに投影し、その子どもの未来を自己のものとして食いつぶしていく〈感傷〉的な関わり方の可能性」や、「子どもという未来の時間にたいして責任をもつことをとおして、現在の生を充実させる関わり方の可能性」が見られる³³。このような〈願望時間〉を有する子ども期の特徴は、レヴィナス思想に表れる子ども期にも見られるだろうか。

まず、「未来」について見てみると、「多産性／繁殖性」を通じて「大人」と「子ども」が、「贈与する権能の贈与」という根源的なものによって繋がる点は既に見てきたとおりである。ここには近代的自我のような「実現されなかった自己の理想」の投影や、子どもの未来を「食いつぶしていく〈感傷〉的な関わり方」は見られない。なぜなら、確かに「贈与する権能の贈与」という根源的な「自己性」「同一性」によって大人と子どもは繋がるが、子どもの未来には現に生きる大人の権能が失われているためである。

一方、「過去」以前に遡る「若さ」について見ると、「甘美な思い出への退行」がないという点では、近代的自我における「ノスタルジーとしての子ども時間」と共通している。だが、「時間の解体」に耐え「よりよい未来へと向かうため」にあるような根源的な時間は、「若さ」に表れるものとは異なっている。確かに、レヴィナスにおいても存在をめぐる問題意識はあったが、その克服には「思惟の思惟」に対置される「無私」としてのあり方が採用されているのであって、想像力による「内なる故郷の発見」という手法は取らなかったのである³⁴。

このように、「未来」および「過去」以前の「若さ」という位相に表れるレヴィナスの子ども期には、「贈与する権能の贈与」や「無私」という人間の根源的なあり方が見られる。そしてそれらの特徴が、〈善さ〉で共通することを見てきた。「超越的な出来事」や「前・始原的」な性格といった側面を踏まえると、レヴィナスの子ども期に表れている「現在」と「未来」と「過去」が単純に繋がっているとは言い難い。しかし、レヴィナス思想における子ども期に通底する「根源的なもの」——それぞれの「子ども」に表れる〈善さ〉——によって、直線的時間ではない特異な位相において繋がっていると捉えることができるのではないだろうか。

また、そのような特異な位相において繋がっている子ども期は、「無垢」が有する他者性によって「可傷性」を取り戻して生き直したり、「近代的自我の意識」のような「時間の解体感」を克服したりするような立場をとることはない。「子ども」の特徴を通じて大人や子どもが現在を生き直すのではなく、「子ども」の特徴の根源にある〈善さ〉自体が探究され続けるのである。

6. おわりに

以上、本稿ではレヴィナス思想における「子ども」およびその諸概念の分析から、彼の「子ども」に表れる特徴について検討してきた。その結果、以下の論点が明らかとなった。

まず、レヴィナスの著作では、さまざまな文脈のなかで「子ども」について言及されている

が、現実世界に存在する「子ども」に対しては、「成熟」に対置されるような「愚直さ」や「無垢」といったネガティブな「幼児性」が見られた。そのような子どもには「誘惑の誘惑」、「知ることの誘惑」に抗する力がなく、保護される必要があった。

だが、「成熟」に対置されるからといって、単なる年齢的な「大人 - 子ども」関係として「子ども」を位置づけているわけではない。それは、例えば「イスラエルの子（民）」に見られたような異質な「若さ」を、一つの「子ども」の性質として見てきたことから明らかである。「子ども」の条件としての「若さ」に、レヴィナスは歴史的時間に組み込まれないような時間の性質とともに、「ナジル人」に内在していた根源的な「善」の性格を見ていた。

そして、「根源的なもの」を有する「子ども」の一側面には、「若さ」のほかに「多産性／繁殖性」に表れる「贈与する権能の贈与」が見られた。「贈与する権能の贈与」は「超越的な出来事」として行われるために、そこには現存する大人の権能はなく、〈善さ〉としての自己性や同一性が「未来」という位相にある「子ども」において構成されるのであった。

また、このような「子ども」の特徴を見てきたとき、それぞれの「子ども」をめぐる主体のあり方に「過去」以前の「若さ」や、「未来」といった時間的性格を見て取ることができた。とはいえ、それらは直線的な時間としてつながっているわけではない。歴史的時間に組み込まれない「若さ」や超越的な出来事としての「多産性／繁殖性」に見られる「子ども」の特徴を、単純に子ども期という時間軸上に結びつけることはできない。しかし、それぞれの時間的性格は、「贈与」や「無私」などに表れる「子ども」の特徴としての〈善さ〉によって繋がっていると解される可能性が見出された。それゆえ、このような時間のつながりを有する子ども期には、近代的自我の時間意識における子ども期とは異なる観点が見られた。

では、そのようなレヴィナス特有の子ども観から、「子どもを育てる」あるいは「教育する」という営みをどのように捉えることができるだろうか。これまでの表現を踏まえると、それは大人自身が「子ども」の根源にある〈善さ〉を更新しつつ、その〈善さ〉を自身の権能が伴わない「無私」の位相において子どもに贈与することである、と言えるのではないだろうか。「大人自身が『子ども』の根源にある〈善さ〉を更新する」とは、「子ども」の特徴を通じて生き直すこと、言い換えれば理想化された子ども期を想像することではなく、「子ども」の根源にある〈善さ〉を探究することを意味する。その探究し続けた根源的な〈善さ〉を「無私」のまま贈与すること、そこに「子どもを育てる」あるいは「教育する」という営みの新たな一面を見ることができないのではないだろうか。

だが、そのような「子育て」や「教育」がそもそも具体的にどのような現象として成り立ちうるのか、という点は不明瞭なままである。この問題について、例えば「教養」³⁵に表れる「語り」方や、関わりに表れる「正義」のあり方など、レヴィナス思想における他の諸概念を検討することで立ち向かうことができるかもしれない。

以上のような課題と展望を残しつつ、本稿を閉じることにする。

注

¹ 「engender l'enfant」の訳語であるが、後述するようにここでの「子」は「超 - 実体化」と

して構成されるものである。ゆえに、生物学的な「出産」としての意味を踏まえる必要はないが、肉体的な現象をメタファーにして「エロス」的關係から派生する「多産性／繁殖性」という問題群を扱うがゆえに、ここでは「子を産む／生む」という表現を用いる。

- ² 『全体性と無限』内で描かれる「女性性」の解釈を、「異性愛生殖」を目的としないような読み方を通じて行ったものとしては千葉（2012）を参照されたい。また性をめぐる批判の検討については内田（2001）を参照されたい。
- ³ 本稿では「無垢」に着目した野村（2006）を取り上げるが、このほかにレヴィナスの「顔visage」の概念から、人が「親」になっていく様相を検討した山口（2004）の研究がある。
- ⁴ Lévinas 2011 [1979] =1999 : 83-84=294. 以下、レヴィナスの著作からの出典は【原著出版年[初出年]=訳書出版年:原著ページ数=訳書ページ数】の順で表記する。
- ⁵ ゆえに、実際に子どもを持たないことに何ら軽視される必要はないとレヴィナスは指摘する（Lévinas 1982=2010 : 63=88）。
- ⁶ Lévinas 2011 [1979] =1999 : 86=295.
- ⁷ 生物学的に見た親子の連続と断絶をめぐる考察については、小泉（2003）を参照されたい。
- ⁸ Lévinas 1980 [1961] =2006 : 235=171.
- ⁹ Ibid., 237=176.
- ¹⁰ 村上（2012）はこれを「言語と行為の可能性を持つ存在の継承」と解釈する。村上は「女性」に生物学や社会生活上の性別とは異なる「コミュニケーションの手前のコンタクト」や「行為の不可能性」といった水準の人間存在のあり方を見て取る。それにより「男性」的存在に「言語」と「可能性」が対置され、「多産性／繁殖性」の文脈では父と息子が選ばれ、その世代交代が表現上描かれることになる。さらに「多産性／繁殖性」による言語的な存在の継承が、「時代を超えた解釈者の対話としての歴史概念」、すなわち「聖史」と呼ばれるレヴィナスの後期歴史概念につながると指摘する（村上 2012, pp. 190-191）。
- ¹¹ 仮に生物学的なものとして捉えると矛盾にぶつかる。『全体性と無限』において「多産性／繁殖性」は「父性」すなわち父子関係として論じられている。にもかかわらず、「子を懐胎する」という「母性」の問題も登場する。『存在の彼方へ』に代表される後期思想でも、主体の「母性」的な問題が取り上げられており、主体をめぐる「父性」から「母性」の位置づけの変更には更なる検討が必要である（檜垣 2012, 156 頁参照）。「子を産む／生む」ことをめぐる「父性」「母性」の問題に対する詳しい検討は、根無（2011）を参照されたい。
- ¹² Lévinas 1980 [1961] =2006 : 247=198.
- ¹³ この見解は小泉（2003）の場合、「生物であること」のリリースと解されている。「生まれて老いて死んでゆくものであり、かつ生みうるもの」と生物を定義したとき、現実に子どもを生むことで「直接的に」、子を生まずとも「現存世代が肉体的に養い合う」ことで「間接的に」、「生物であること」が親から子へとリリースされるのである（小泉 2003, p. 94）。
- ¹⁴ 野村 2006, pp. 3-4. ゆえに「精神分析などでしばしば言われるような退行の現われとしての幼児性といったことではなく、また児童学などで言われているような、一般に子どもと呼ばれる人だけが持つ特有の世界といったものでもない」。
- ¹⁵ 野村によると「他者」論として「無垢」概念を捉える点が、ルソーやブレイクに見られる従来の無垢概念とは異なるという。確かに、子どもたちに「無限なるもの」に触れさせ、「想像力」を発揮させようとする共通点は見取することができる。だが、「無垢」なる子どもたちと接する人々（大人たち）にどのような影響が生じるのかという問題に、彼らの概念では明確な応答が得られないという（野村 2006, p. 6）。
- ¹⁶ 野村、同上、p. 8.
- ¹⁷ 「子ども」が「無垢」概念のうちに包摂されているものとして、例えば[Lévinas 1988=1993 : 98=140]。
- ¹⁸ 例えば [Lévinas 1993 [1991] =1993 : 108=138] 。
- ¹⁹ この講演は、フランス語圏ユダヤ人知識会議で行われたタルムードの講話の一つである。レヴィナス思想を理解するとき、哲学的なテキストとユダヤ教論的なテキストを別々のものとして論じる立場がある。だが、両者の内容上の相関関係があるだけでなく、哲学的なテク

ストについてユダヤ教論を読むことで理解可能となる部分がある、という村上（2012）のような立場もある。本稿では村上の立場を採用し、レヴィナスの著作全体に目を向ける。特に、この講話で行う註解について、レヴィナス自身が「哲学者」の立場が不利にならないような配慮として、「神」という観念を持ち込むことを可能な限り控えている点などを踏まえれば、この講話を哲学的な観点の理解に援用することは不適切なことではないと思われる。

²⁰ Lévinas 1968=1987 : 72=82. なお、「純潔無垢」にあたる l'innocence は、「純真」「潔白」とも訳されており、このように表現するときの「無垢」には「成熟した大人が事後的に体得すべきものだ」というレヴィナスの立場が描かれていると、訳者の内田樹は指摘する。

²¹ Ibid., 74=84.

²² Ibid., 74=85. ここでいう「哲学」とは、経験しながらも経験に巻き込まれない安全地帯としての「自我」を有した「知」の経験を意味している。

²³ Ibid., 72=82.

²⁴ Ibid., 91=103-104.

²⁵ この記述のもととなる詩篇 103 篇 20 節は、日本聖書協会訳の聖書では「みことばの声に聴き従い、みことばを行う力ある勇士たちよ」というように、「聞き従う」と「行う」の順番が逆転している。だが、レヴィナスはこの講演において、ブーバーによる独語訳の解釈について言及しつつ、この順番が「行う」「聞き従う」であることの意義を強調している。

²⁶ レヴィナスの「子ども」に関する記述については、Ciocan ら（2005）がレヴィナスの諸著作からリストアップした箇所を参考にした。このうち参照したのは、以下の通りである。「enfance」（44 か所）、「enfant」（200 か所）、「enfantement」（3 か所）、「enfanter」（9 か所）、「enfantillage」（6 か所）、「enfantin」（28 か所）。

²⁷ この講演も、前章で取り上げた「誘惑の誘惑」と同じく、フランス語圏ユダヤ人知識人会議で行われたタルムード講話である。

²⁸ Lévinas 1977=1990 : 66=89-90.

²⁹ Ibid., 79=106.

³⁰ Ibid., 80-81=108.

³¹ 「善」の「選び」について、例えば『存在の彼方へ』では次のように語られている。「〈善〉は自由に委ねられるものではない。私が〈善〉を選び取るよりも先に、〈善〉のほうが私を選んだのである。……主体性には〈善〉を択ぶために必要な時間的猶予が与えられていない」（Lévinas 1974=1999 : 13=41）。

³² 矢野 1995, pp. 24-25.

³³ 同上, p. 28.

³⁴ とはいえ「内なる故郷」を、藤井（2000）のように主体が出来してくる〈存在〉と解した場合、それは想像力によって形成されたものではなく、人間には到達できない超越的な次元となる。その場合、「他者」への到達が不可能であるように、〈存在〉への到達不可能性が、ある種の「投影としての過去」というノスタルジーを呼び起こすと解することができ、それを「内なる故郷の発見」と呼ぶことは可能であると思われる。

³⁵ 「教え enseignement」をめぐるレヴィナスの思考に、平石（2012）は「反自然主義」という特徴を見ている。そこには、「人間の理性の発現としての自律が、人間の生の自然そのものの内にはいかなる根拠も持ち得ず、他者による〈教え〉という他律を通じて絶えず賦活されることで初めて、その本性を全うすることができる」というレヴィナスの主張が縮約されているという（平石 2012, p. 126）。

【参考文献】

Ciocan, C., Hansel, G. *Levinas Concordance*, Dordrecht, Springer, 2005.

Lévinas, E. *Quatre Lectures Talmudiques*, Paris, Minuit, 1968. = 『タルムード四講話』内田樹訳、国文社、1987年。

——— *Autrement qu' être ou au-delà de l' essence*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1974.

- = 『存在の彼方へ』 合田正人訳、講談社学術文庫、1999年。
- *Du sacré au saint. Cinq nouvelles lectures talmudiques*, Paris, Minuit, 1977.
= 『タルムード新五講話——神聖から聖潔へ』 内田樹訳、国文社、1990年。
- *Totalité et infini. Essai sur l' extériorité* (Phaenomenologica ; 8), La Haye, Martinus Nijhoff, 1980 [1961]. = 『全体性と無限』(上・下) 熊野純彦訳、岩波文庫、2005-2006年。
- *Éthique et infini Dialogues avec Philippe Nemo* (Le Livre de poche), Paris, Librairie Arthème Fayard et Radio-France, 1982. = 『倫理と無限 フィリップ・ネモとの対話』 西山雄二訳、ちくま学芸文庫、2010年。
- *À l' heure des nations*, Paris, Minuit, 1988. = 『諸国民の時に』 合田正人訳、法政大学出版局、1993年。
- *Entre nous. Essais sur le penser-à-l' autre* (Le Livre de poche), Paris, Grasset, 1993 [1991]. = 『われわれのあいだで』 合田正人訳、法政大学出版局、1993年。
- *Le temps et l' autre*, Paris, Quadrige/PUF, 2011 [1979]. = 「時間と他なるもの」『レヴィナス・コレクション』 合田正人編訳、ちくま学芸文庫、1999年、pp. 231-299.
- 内田樹『レヴィナスと愛の現象学』 せりか書房、2001年。
- 小泉義之『レヴィナス——何のために生きるのか——』 NHK出版、2003年。
- 千葉雅也「「エロスの現象学」と半開きの箱 レヴィナス論(2)」『現代思想』(第四十巻第七号) 青土社、2012年、pp. 46-52.
- 根無一行「レヴィナスにおけるエロスと子を生むこと(父性)をめぐる一試論——救済の問いに向けて」『宗教学研究紀要』 vol. 8、2011年、pp. 20-39.
- 野村洋平「新しい「無垢」概念の形成に向けて——エマニュエル・レヴィナスとフランツ・カフカの思想による子どもの再発見——」『ソシオロジ』 51(1)、2004年、pp. 3-18.
- 檜垣立哉「逆向き幽霊としての子供——デリダに対抗するレヴィナス——」『現代思想』(第四十巻第三号、2012年3月臨時増刊号、総特集レヴィナス) 青土社、2012年、pp. 147-157.
- 平石晃樹「他律による自律——レヴィナスにおける〈教え〉概念をめぐる——」『教育哲学研究』 第104号、2012年、pp. 114-132.
- 藤井奈津子「ノスタルジーの深層」 亀山佳明・麻生武・矢野智司編『野生の教育をめざして——子どもの社会化から超社会化へ』 新曜社、2000年、pp. 112-134.
- 村上靖彦『レヴィナス——壊れものとしての人間——』 河出ブックス、2012年。
- 矢野智司『子どもという思想』 玉川大学出版部、1995年。
- 山口美和「「親」になるということ——E. レヴィナスの「顔」の概念を手がかりに——」 臨床教育人間学会編『他者に臨む知』 世織書房、2004年、pp. 219-238.

(臨床教育学講座 博士後期課程2回生)

(受稿 2012年9月3日、改稿 2012年10月31日、受理 2012年12月27日)

**The Meaning of Children in Levinas's Thought:
Goodness, which is linked to Past, Present, and Future**

FUKUWAKA Masato

This paper aims to clarify features of children to which Levinas referred. For this purpose, some conceptions in his thought concerning children were investigated (i.e. “fecundity,” “innocence,” and “youth”). In his writings, “innocence” was found as being naively honest, which is opposed to the integral lucidity. “Fecundity” was found as “goodness,” which gave the power of giving, and “youth” as “goodness,” which Israelite was endowed. The former, “fecundity,” showed the nature of goodness of transcending from present to future; the latter, “youth,” transcending from present to past. According to this investigation, in conceptions of children in Levinas's thought, Goodness is linked to past, present, and future. However, this Goodness is not in the synchronic dimension, and is not categorized as moral. The perspective of children that includes Goodness in Levinas's thought is different from that of the modern ego. His perspective of children tells us the meaning that we enjoy features of children and also provides us with clue to reconsider the reason for rearing children.